

会 議 録

会議の名称	市民参加推進会議（第20回）		
事務局	企画財政部企画政策課企画政策係		
開催日時	平成21年11月25日(水)午後6時10分～午後8時00分		
開催場所	小金井市役所第2庁舎801会議室		
出席者	委員長 坪郷 實 委員 副委員長 浅野 智彦 委員 委員 金子 修二 委員 須内 勝子 委員 持永 利之 委員 森実 邦明 委員 境 智子 委員 内藤 治誠 委員 本多 龍雄 委員 上原 秀則 委員 欠席委員 石黒めぐみ 委員 高岡 裕 委員		
事務局	長期総合計画等担当部長 企画政策課長 企画政策課調整担当課長補佐 企画政策課主査	伊藤 茂男 天野 建司 高橋 啓之 吉川 まほろ	
傍聴の可否	<input checked="" type="radio"/> 可 一部不可 不可		
傍聴者数	0人		
【会議次第】 1 開会 2 市民参加条例運用状況等について (1) 平成21年8月28日付け市民参加推進会議からの提言に対する市長の意見について (2) 若者の市民参加について (3) その他 3 次回推進会議の開催日について			
【会議結果】 ■開会 ■平成21年8月28日付け市民参加推進会議からの提言に対する市長の意見について ■資料及び経過について ・企画政策課長より説明 ■若者の市民参加について ■事務局提出資料について ・企画政策課長より説明 ■浅野委員より資料説明と報告			会議録ページ P 1 P 3 P 4
【主な意見】 ○市内にある大学の学生達の地元に対する研究成果の発表などに、4年間という制約はあるが、市がバックアップし、宣伝、宣揚などしていくと市民参加というようになるかは			P 1 6

<p>未知数だが、ある程度前向きに考えられるのではないか。</p> <p>○自分の住居の周りは、みな高齢化し、行事の手伝いを頼もうにも若い人が出てこないが、その辺はどのようにとらえているか。</p> <p>・若者の年齢を15歳から29歳として話したが、最近では若者というのを20代後半から30代前半ぐらいの勤め人まで焦点に入れるケースも出てきているので、あながち移動していく人達ばかりではないのかと思う。全体として若者人口自体が減っているのでこれから50年くらいは少なくなっていく傾向は止めようがない。これは、出生率を多少回復させても簡単に回復する問題ではないので、できることは、言われれば参加する気があるという3割ぐらいの若者に何らかの働きかけをするということぐらいかと思われる。効果的な働きかけは、なにかと言われると思いつかないが、一面だけをとらえるのは難しい問題だ。</p> <p>○10年、20年単位で市内の人口は微増していると思うが地元には仕事がないし、むしろ住宅地であることを売り物にした、住宅をキーにしたアイデアを考えた方が良いのではないか。今スタートしている野菜のアイデア等は良いと思うが、工夫して新しいプロジェクトをもう少し作らないといけないのではないか。</p> <p>○若者の市民参加の事例で、藤沢市が実験で作っているIT会議室の事例はとても面白いと思った。こういう若者を市民参加させるプロデュースが必要なのだろうと思う。</p> <p>○地域の行事に参加する若者が少ないという話があったが労働組合への加入率も下がり、役員は四苦八苦している状況のようだ。今の経済状況もあるが、そういう背景もあって組織活動などが減っていくというのは社会情勢ともリンクしていくのかと感じた。そのような状況の中で若者に地域の市民参加を促していくには社会のシステム、仕組みを変えていかないと難しいのではないかと考えた。</p> <p>○小金井市にも「学びあい出前講座」という良い物があるのに、講師派遣が土日にはない。千代田区では土日に講師派遣をやっているそうだが、若い人たちに聞いてほしい講座もたくさんあるので、小金井市でも土日の講師派遣をやってもらい、その様な点から市民参加の糸口になってほしいと考える。</p> <p>○若者と市政の接点をどのようなところにおこうとしてい</p>	<p>P 1 7</p> <p>P 1 8</p> <p>P 1 9</p> <p>P 2 1</p> <p>P 2 4</p> <p>P 2 5</p>
--	---

<p>るのか。市が主体的にリードし場の設定をしてほしい。市民というのは個人個人だから、市として当面の助走期間のリードをしてもらわないと組織化しないと思う。どういう場面を設定したらよいかということのために今日の会議があると思うが。</p> <p>○若者が買い物をするとき政治性を発揮する、倫理的・社会的な理由で物を買ったり、買わなかったりする「バイコット」の話が自分にも当てはまると思い興味深かった。地元で愛着を持った企業を興すとか、アイデアや、提案を誰でもが出せる場などは、若者も参加しやすいのではないだろうか。</p> <p>■ 次回の討議事項について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 若者の市民参加についての議論を継続する。先進市の事例を資料提出し、それをもとに、浅野委員からの説明報告と今回の論点を整理し議論をする。 <p>■ 次回日程</p> <p>平成22年1月29日（金） 18：00～</p>	<p>P 2 6</p>
<p>【提出資料】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 市民参加条例第20条第1項の規定に基づく提言に対する意見について <ul style="list-style-type: none"> ・ 市民参加条例第20条第1項の規定に基づく提言 ・ 小金井市市民参加条例の一部を改正する条例(平成21年条例第12号)付則第2項について 2 年代別投票状況調べ <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成17年3月市議会議員選挙～平成19年7月参議院議員選挙 ・ 平成21年7月12日都議会議員選挙 ・ 平成21年8月31日衆議院議員選挙 3 公民館提案、市制施行50周年記念事業「食を通じた街の活性化」月刊「こうみんかん」379号 4 小金井市の世帯と人口 5 市民参加の前提となる若者の意識について 浅野智彦 	

第20回小金井市市民参加推進会議

日 時 平成21年11月25日（水）午後6時10分～午後8時00分

場 所 小金井市役所第2庁舎 801会議室

出席委員 10人

委員長 坪 郷 実 委員

副委員長 浅 野 智 彦 委員

委 員 金 子 修 二 委員 須 内 勝 子 委員

持 永 利 之 委員 森 実 邦 明 委員

境 智 子 委員 内 藤 治 誠 委員

本 多 龍 雄 委員 上 原 秀 則 委員

欠席委員 石 黒 めぐみ 委員 高 岡 裕 委員

事務局職員

長期総合計画等担当部長 伊 藤 茂 男

企画政策課長 天 野 建 司

企画政策課調整担当課長補佐 高 橋 啓 之

企画政策課主査 吉 川 まほろ

傍 聴 者 0人

（午後6時10分開会）

◎坪郷委員長 あと1人お見えになってないですが、時間になりましたので、ただいまから第20回市民参加推進会議を開催いたします。それでは、本日の次第に従い、市民参加条例運用状況等についてを議題といたします。

初めに、平成21年8月28日付け市民参加推進会議からの提言に対する市長の意見についてを行います。資料が提出されておりますので事務局の説明を求めます。

◎天野企画政策課長 本市民参加推進会議におきましては、前回及び前々回の2回にわたって、市民投票に関する件で、小金井市市民参加条例の一部を改正する条例付則第2項についてを協議していただきまして、8月28日付けで市長に対して提言をいたしました。その提言に対する市長の意見を配付しておりますように、9月18日付けで公表いたしましたので、報告をさせていただきます。内容は資料1をごらんいただきたいと思います。

事務局からの説明は以上でございます。

なお、昨日の総務企画委員会にて、市民参加推進会議に関する陳情書について議論がございました。陳情の中身は、5月22日、7月17日に開催された市民参加推進会議での議事の中で発言に関してではありますが、保留となっております。したがって、結論が出ました

ら、次回には皆様にお知らせいたしますので、本日のところはそういった陳情書が出ているということでご理解のほどよろしくお願ひします。

以上です。

◎金子委員 ちょっといいですか。

◎坪郷委員長 どういう件でしょうか。

◎金子委員 今の件。先ほど出がけにこれを見て、陳情書が出ているということに気がついた。

◎坪郷委員長 その陳情書の件については、今、ご説明がありましたように、総務企画委員会にかかっているところで、最終的に結論が出ていないということですので、きょうはここでの議論はしないことにしたいと思うんですが。

◎金子委員 これ、採決は、事務局に先ほど聞いたんですけれども、議員が1人欠席しているので、採択しなかったと。議会で議ったということなんですけれども、これは我々に対してどういう影響があるんですか。

◎坪郷委員長 その点も含めて、内容についてもここで正確な形で今のところまでできないということでしたので、ここで議論することはきょうのところはしないでおきたいと思うんですが、ご理解いただけますでしょうか。

◎天野企画政策課長 議会の結論が出ましたら、皆様にご報告いたしますので、きょうのところは。

◎金子委員 発言の内容って事務局も言っているんですけれども、何か拘束されるんですか。

◎天野企画政策課長 いや、特に。発言の自由等がございますので、拘束等はございませんので、そのことについては。

◎坪郷委員長 そのことと関係なく私は発言しますが、ここでの議論は自由に議論をして、最終的に我々の結論として出したものが公表されるということですので、議論自体は自由ですので、一般的にはそういうことでやりますので。

◎金子委員 ただ、個人名が出ていましたよね、委員の方の。

◎坪郷委員長 ですので、そのことについてはきょうはこれ以上は議論しないということでお願ひしたいんですが。

◎金子委員 どういう影響があるかなということだけは知っておかないとね。個人名が出るというふうに。個人の発言が制約されたり、発言の内容によっては議会で取り上げられたり。

◎坪郷委員長 一般的にしか私は言うことはできないんですが、この委員会での発言は、皆様のご意見については自由に発言していただいて、それぞれの課題について結論を出すということをやりますので、それはこれまでどおり自由にやりますので、それについては一般的にはご心配ありません。

では、今日についてはそういうことにさせていただきたいと思います。

今、ご説明があったのは、市のほうは市民投票に関する件で、市長の意見について、議会にもそれは報告をされています。これは資料1の1枚目のところに市長の意見がついております。

これについて皆さんのほうで質疑等があれば、まずごらんいただいとということにしたいと思うんですが、この点についていかがでしょうか。はい、どうぞ。

◎持永委員 前回配付されました資料の中に川崎市の市民投票の成立過程ですか、それを拝見したんですけれども、結局、ああいう方法を小金井市にもとられたらいいですね。オープンに、こだわらずに学識経験者をしっかり入れて、それで論議していただく。市長の回答の中にもそういうことは載っていませんけれども、経過を広報に載せるとか、インターネットで流すとか、気楽な感じで市民投票の進め方を市民に伝えてもらいたい。それが私の要望です。

◎坪郷委員長 それは2のところで確認されているところですが、これは。

◎天野企画政策課長 提言に対する市長の意見ということで、今、市民参加による市民投票制度の条例化に向けた附属機関設置に必要な措置を講じることとするというふうに言っていますので、そういったところで、今、委員がおっしゃったような形を踏まえて、今後検討していきたいと思っております。

◎坪郷委員長 市長の文面でも、現行の制度の状況を勘案しつつ、市民参加による市民投票制度の条例化ということになりますので、市民参加ということになっておりますので、今のご意見に近いのではないかと思います。ほかの方はご意見はいかがでしょう。よろしいでしょうか、この件については。

(「はい」の声あり)

◎坪郷委員長 では、まだこれから私たちの議論を進めていく中で、この点についても審議を続けていきたいと思っております。

本日は2番目の議題としまして、若者の市民参加という議題にしております。これについては幾つか事務局のほうで資料を提出していただいておりますので、それについて説明をしていただいて、その後、浅野委員のほうからご報告をいただくことにしたいと思います。

まず、事務局で整理をしていただいた資料について説明をお願いします。

◎天野企画政策課長 本日、3点の資料を提出しております。最初に資料2をごらんください。

平成17年3月の市議会議員選挙から平成19年7月の参議院議員選挙の年代別投票状況の一覧表と、今年の7月12日の都議会議員選挙及び8月31日の衆議院議員選挙の年代別投票状況調べです。選挙管理委員会に確認したところ、年代別の投票率については、平均投票率に最も近い投票率を示す1投票区について報告をすることになっているとのことで、都議選、衆議院議員選挙においては第8投票区、南中学校ですが、その投票率からの抽出となっております。一般的な傾向でございますが、20代の投票率は各年代の中で最低となっているところでございます。

続きまして資料3をごらんください。昨年、市制施行50周年を記念いたしまして、公民館が15歳から25歳の若者をターゲットとしまして、市政への提言をしていただくということで、企画から運営まで任せるとの呼びかけに高校生3人、大学生4人が参加し、食を通したまちの活性化をテーマにプレゼンテーションを行う企画で事業が行われました。その後、今年の

11月6日の朝日新聞ですが、大学生のサークル活動へと取り組みが進み、地域と大学生のかわりと発展してございます。ただいまお配りしますのは、本日、追加で月刊こうみんかんという公民館発行の配付物でございます。関連の資料でございますので、後ほどご覧いただければ幸いです。

続きまして、資料4をごらんいただきたいと思います。今年の11月1日現在の小金井市の年齢別人口の一覧でございます。外国人登録人口を含め5歳階級別人口では、25歳から29歳が9,430人で、人口総数に対する割合が8.3%と一番高くなっています。

また、年齢別の外国人登録人口の一覧をごらんください。総括表の人口総数と若干の相違がありますが、集計上の時点の誤差でございます。総数2,427人のうち20代が997人で、44.1%と高率になっています。大学関係の留学生の関係かと思われるところでございます。

事務局からの資料は以上でございます。

◎坪郷委員長 今、説明をしていただきましたが、これについてもご議論があると思いますが、時間の関係もありますので、まず浅野委員のほうから報告をいただいて、資料も含めて議論を進めていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、資料は配られたと思いますので、浅野委員、よろしく願いいたします。

◎浅野委員 どのくらいの時間を見込めばよろしいでしょうか。

◎坪郷委員長 まず、全体が2時間で8時までですので、後半で若干の時間は必要ですが、ほぼこれにあと1時間半は使えると思いますので。

◎浅野委員 そうしましたら、30分ぐらい私、報告して。

◎坪郷委員長 もう少ししてもいいのかと。きょうの議論を踏まえて、きょうでおそらくまとめはできないと思いますので、もう一回続けてもいいかなとは思っておりますので、30分ではちょっと……。資料を準備していただいているので、もう少し40分とかやっていたいただいてもよろしいかと。

◎浅野委員 ありがとうございます。若者の市民参加ということで、そもそも市民参加の前提条件になるような意識が若者にあるかどうかということ、少し統計データに当たって確認しておきたいというのが、今回の話題提供の目的になります。全体で5つぐらいのポイントについてお話ししようと思います。

まず、第1点目ですが、この間もそういうご質問が出ていたと思うんですが、そもそも若者というのは何歳ぐらいの人のことをいうんですかという問題があります。最初に表を提示してあります。この報告の中で参照する調査の一覧です。最初の3つは内閣府が行っているもので、最後の1つは私が自分の研究プロジェクトの中で行った調査です。それぞれ実施年と調査の対象を記してあります。

ごらんいただけるとわかりますように、同じ内閣府がやっている調査でも、例えば青少年の生活意識調査ですと15歳から23歳。正確にいいますとこれは青少年で、少年についても調査をやっています。13歳から14歳だったかな。なので、年齢幅はもう少し広いんですが、

いわゆる青年というふうにカウントされているのは15歳からという扱いになっていますので、15歳から23歳は青年であると。同じく世界青年意識調査、これも内閣府が行っていますが、年齢は18歳から24歳。その次の社会的自立調査、これも内閣府が行っていますが、15歳から29歳ということで、実は若者とか青年というふうに言いましても、何歳までのことを言っているのかということについては、特に定義があるわけではありません。法律上も多分、いろんな定義があります。例えば少年法の年齢と児童福祉法の年齢はずれていたりとか、そういった問題があるかと思います。ですから、この報告の中では暫定的に便宜上、一番下と一番上をとって、15歳から29歳の男女を若者と呼ぶことにしておこうと。暫定的にそういうふうにしておきたいと思います。

そうしますと、当然、参政権の都合上、18歳と16歳の問題が出てくるんですが、後でデータをごらんになるとわかるんですが、18歳という年齢層は、実は市民参加について最も消極的なグループに属しております。ですから、この年齢に政治参加をさせようと思った場合、もう少し積極的な教育なり、何なりの措置が必要になってくるだろうと個人的には考えております。

そういうわけで、そういう年齢定義を暫定的にしておいて、2番目以下のお話に進んでいきたいと思います。

まず、最初に確認しておきたいのは、我々と若者の間にどれくらい意識の差があるだろうかということです。つまり端的に言って、大人目から見たときに、若者というのは異質な存在なのかどうかということです。一般的にメディアの報道を見ている限りでは、若者というのはエイリアンのような理解が難しい存在であるというふうにとめられがちなんですが、実際には基本的な意識については接近しつつあると言えらると思います。

下にある図をごらんください。少し複雑な図なんですが、これはNHKの放送文化研究所という研究所がありまして、そこが1973年以降5年置きにやっております日本人の意識構造に関する調査のデータからつくられた図です。例えばこれは2つ軸が交差して平面をつくっているわけですが、このデータですと、2003年までのデータを使っているんですが、1973年から2003年まで、ずうっと同じ質問を聞き続けているんです。年によってだんだん答えが変わっていくわけです。その変化を図示したものです。

ただ、すべての質問項目について図をつくるとあまりにも複雑なので、質問項目を整理して、2つの軸に圧縮しているんです。1つの軸が伝統離脱と伝統志向というもので、要するに伝統に対してどれくらい忠実であるか、逆に伝統からどれくらい離脱しているかというのをはかる質問項目をあわせたものと考えていただいて結構です。もう一つがまじめ志向か、遊び志向か。例えば生活の価値観において余暇を重視するか、仕事を重視するかといったたぐいの質問を集めて、遊びに志向する人たちなのか、まじめに志向する人たちなのかという整理をしたものがこの軸ということになります。

この2つをかけ合わせることによって、4つの証言というんでしょうか、4つのグループが

出てくるわけですが、この上に各世代の得点を打っていくというのがこの図の描き出ししているものです。例えば一番左側に「戦争」と書いてある星座みたいな図があると思うんですけども、この「戦争」というのは、下の表を見ていただくとわかるんですが、戦争世代の人たちが各調査時点でどのように答えていたかということの意味しています。

例えば「戦争」と書いて、すぐ上に打たれた点に73年と書いてあります。これは戦争世代の人たちが1973年に答えた回答をもとにすると、大体この辺に点を打つことができますよということ。73年の左隣にもう一個点が打ってありますが、これが78年の回答。その上にいっていますけれども、これは83年の回答というふうに、これは5年置きに回答した得点から算出された点数を平面上に打っていつているものです。

同じようにその隣に書いてある「第一戦後」というのは、これも「第一戦後」世代と呼ばれる人たちで、生まれた年でいうと、1929年から43年ということになります。この世代の人たちが各時点での調査にどう回答したのか、その回答がどう変化したのかということを経図にあらわしているわけです。

なので、成り立ちは複雑なんですけど、話としては比較的簡単で、この三十数年の間に意識がどう動いたかを世代別に分けて図示したものというふうに考えていただければいいと思います。

そうすると、幾つかのことがわかるのですが、1つわかるのは、どの世代も30年かけてそれほど大きくは変わらない。例えば「戦争」世代の人たちの回答がいきなり右側の証言のほうに移ったりするということではなくて、大体狭い範囲で動いている。同じように「第一戦後」の人たちの意識というのも、大体この狭い範囲内で変動しているということが言えます。つまり各世代それぞれ固有の意識の構造というか、型のようなものを持っているということから読み取ることができます。それが第1点です。

しかし、2点目に、どちらかというところのほうに興味深いんですが、これは右にいくに従って若くなるんです。つまり一番左が戦争世代で、1928年生まれの人たち、1928年以前の生まれの人たちを含んでいるんですが、「第一戦後」はそれよりも若く、その次は「団塊」世代はそれよりも若く、「新人類」世代はそれよりも若く、「新人類」世代は私の世代なんですが、その後「団塊ジュニア」とか、「新人類ジュニア」が来るというふうに、右にいくに従って若くなります。

見ていただくとわかるように、星座のようなこの図が右にいくに従ってだんだん接近してくるんです。つまり後にいくに従って、世代に下になるに従って世代間ギャップが小さくなっていくということです。

実はこのデータは、私、勤務先の関係上、学校の先生方にこの話をするのが時々あるんですけども、学校の先生方にお話を伺うと非常におもしろいなと思うのは、上の先生から見ると、例えば50代の先生から見ると、30代の先生というのは、どちらかという教師の先輩、後輩というよりは、むしろ生徒に近いものと見えているんです。最近の若いやつらはという話になるんです。つまり、それはもっともなこと、50代、40代、30代と並べた場合に、

50代の人と40代の人との落差よりも、40代の人と30代の人との落差のほうが小さく、30代と20代の落差はもっと小さく、20代と10代はさらに小さくなる。

例えば40代の人から見ると、30代の方は当然のことながら、むしろ学生とか生徒のほうに近いものに見えてくるわけです。なので、メディアでは、大人と若者の間には非常に大きな溝があるというふうに考えられていますけれども、実際には下にいくにしたがって、その溝は小さくなっていると理解したほうが良いということです。

なぜ、そういうことが起きてしまうかということ、1つには消費社会化の進行ということがあり、つまり、さまざまな文化が商品化されることによって、だれでもそれを消費できるようになっているんです。その結果として、子どもが消費しているものを大人が消費する。逆に、大人が消費しているものを子どもが消費するといったような、消費における大人と子どもの敷居の経過が起こっているということの原因の一つとして考えることができますと思います。大人文化と若者文化がだんだん区別できなくなっているということですよね。

例えば象徴的な例を挙げれば、電車の中で漫画雑誌を呼んでいる30代のサラリーマンの姿というのは今では全然珍しくないわけです。これが例えば1970年代であれば、相当奇妙な光景だったわけですがけれども、90年代以降そういった光景はとりたてて珍しいものではなくなっています。あるいはアニメにしても、ゲームにしても、ビデオゲームの調査なんかをやってみると、家庭の中でだれがゲームをやるかということ、子どもではなくて、父親だったりするということが多々あります。30代、40代のお父さん方がまずゲームをやり、子どもと取り合いになるということはしばしば聞く話であります。

そういったように、大人文化と若者文化、あるいは子ども文化の区別が徐々になくなりつつあるという現実が一方にあります。

他方でもう一つの原因としては、今まで大人になるための印だと考えられていた幾つかの出来事がだんだん成り立たなくなってきたということがあります。その典型が就職であります。すなわち、例えば高度成長期及びその少し後ぐらいまで、1970年代の半ばぐらいまでは、就職し、そこにずうっと勤め続けるということがごく普通のことだったわけです。それが成り立たなくなっている。就職できない、そもそも。私も学生を指導していて、それはほんとうに痛切に感じますけれども、就職も難しい。見つかった就職先もずうっと安定かということ、そんなことは全然ない。

さらに、離職率も不景気にもかかわらず下がっておりません。3年以内に離職する若者の比率は753というふうによく言われるんですけれども、中学卒業時点で就職した人は7割、高卒時点で就職した人は5割、大卒時点で就職した人は3割が3年以内に離職してしまうんです。その数字は、不景気にもかかわらずあまり変わっていないんです。ですから、就職してもそこにずうっと勤め続けるということがだんだんまれなことになってきているということがあります。

さらにまた、結婚しない若者が増えております。結婚するか、しないかは、ある意味では大

人と若者、子どもの分かれ目であった時代もあるわけですが、今ではそもそも結婚しない。さらに言うと、結婚した後に出産をしないということで、かつて大人になるために越える敷居と考えられていた3つの出来事というんでしょうか、通過儀礼とでもいうんでしょうか、そういうものがだんだんと成り立たなくなっているということがあります。ですから、昔ながらの意味で、大人になるということがだんだんと難しくなっているということがあると思うんです。

そういった2つの条件が重なり合って、大人と子ども、あるいは上の世代と下の世代の意識が徐々に接近しているということがあるのではないかなと思います。

しかし、にもかかわらず、これはとてもおもしろいところだと私自身は思うんですが、若者に実際に話を聞くと、学年が1個違うだけで全然違うんだということをおっしゃる。これは委員長もそういう経験があるんじゃないかと思うんですけれども、例えばルーズソックスがはやったのはうちの下の世代からとか、プリクラブームはうちの下の世代からとか、要するにたった1年学年が違うだけで、あいつらは全然違うと。最近であれば、あいつらはゆとりだからという言い方をするわけです。いわゆるゆとり教育を受けてきた世代だから、おれらとは違うとか、国立大学法人ですと、センター試験の管区がある時期に増えたんです。増える前の世代の人たちは、増えた下の世代の人たちをあいつらは5教科世代だからと言ったりするというふうに、客観的に見れば、意識の差はどんどん縮まっているのに、当事者たちの目にはほんの微細な差異がとても大きく映じているという逆説的な事態があったりもいたします。

このことをどう解釈するか。いろんな解釈がありますが、私の考えでは世代間格差、世代間差異がだんだん小さくなってきたので、世代内の差が大きく浮かび上がってきているんじゃないかと。つまり10歳上の人たちとの差がどんどん小さくなってきているので、逆説的に1歳とか2歳年下、年上の人たちとの違いのほうに際立ってきているんじゃないかと。世代間の違いが縮小したことによって、逆に世代内の差が大きく見えてきているということがあるのかもしれないということです。

後でお話しするんですが、この世代内の違いが際立っていることが、若者だからといって連体できるとは限らないという状況を生んでいるように思います。例えば私もまだ子どもだったので、よく覚えてないんですが、1968、9年のいわゆる学生闘争、学生運動、学園闘争のところの学生たちは、おれたち若者とあいつらは大人だという形で、おれたちは若者であるというだけでわりあい簡単に連帯ができたんです。それが今はできなくなっているということだと思います。

というわけで、若者は実は下にいくにしたがってだんだん同質化しているという、そのことを確認した上で、地域とか、市民参加についてはどうなのかということを確認していきたいと思います。

ここから先はあまり明るいデータはありません。大変悲観的なデータばかりなんですけど、まず地域の活動への参加がどうなっているかというお話です。結論から言いますと、8割の若者

はそういった参加をしておりません。例えば下のグラフの左側のものを見ていただきましょうか。これは内閣府の青少年の生活意識調査のデータですが、15歳から17歳、18歳から21歳、22歳から24歳と3層に分けて見ていますが、いずれも「よくある」「ときどきある」を足し合わせても2割いかないんです。8割以上の人が「あまりない」もしくは「まったくない」と回答しておりまして、8割ぐらいが参加していないと言っているような状況であります。

ついでに言いますと、18歳から21歳の年齢層が参加から撤退している傾向が見てとられるということです。この辺はどういう事情があるのか。いろんな仮説が考えられますけれども、今のところ確認できるのは、この年齢層が参加において消極的であるということだろうと思います。

それから、同じように、これは私がやった調査ですが、ちなみにこの調査は杉並区で行った調査であります。杉並区で地域の行事に大人と一緒に参加することがありますかと尋ねてみますと、これは16歳から29歳の男女ということですが、ここでもやはり「よくある」「ときどきある」と答えたのは2割に満たない数字ということになります。8割はやはり「あまりない」とか「まったくない」と答えているわけです。

そして、参加している人は一体何に参加しているのかということですが、結論を言うと、お祭りとレクリエーションに参加しております。3つ目のグラフを見ていただきたいんですが、これは参加しているというふうに答えた人たちに対して、最近1年間でどのような活動に参加しましたかと尋ねたデータです。

ほかにもいろんなものが並んでいるんですけども、ほかのものはあまりにも数字が低過ぎて、ここで紹介するには達しないと思いましたので、数字は高いものだけここに挙げてあります。

地域のお祭りというのは、どの年齢層でも一番高いということになります。例えば公民館・青年館などの講座や催しというのは、こういうところに参加していただきたいと我々としては考えたところなのですが、非常に低調であるということが言えます。スポーツやレクリエーションは比較好調ですが、それでも10%いかないわけですから、相対的には好調であっても、全体的にはそれほどにぎわっているとは言にくい状況なのかなと思います。

以上が非常にネガティブ、消極的、悲観的なデータですが、今は参加していないが、もし可能であれば、そうする機会があれば参加したいと思いませんかというふうに尋ねてみたらどうかというのが、2ページの一番下にあるんです。「あなたは、そうする機会があれば、家の近くや地域の中で大人たちと以上に何かやりたいと思いませんか」ということで、これも内閣府の調査ですが、これを見ますと、「時々ならやりたい」というところまで含めると、おおむね5割ぐらいの若者たちがやりたいと答えています。ですから、8割が今やっていないんです。ですが、5割がやる気はある。ですから、差し引き3割は潜在的な参加層とみなすことができる。なので、働きかけるとすれば、この3割ということになるのかなと思います。

ただし、ここでもやはり18歳から21歳が消極的であるということです。18歳が受験が

期間にかかっているということもあったりするのかもしれませんが、この真ん中の年齢層がいろんな意味で消極的であることが見てとられます。

続きまして、市民参加の前提になる自分が住んでいる地域に対してどの程度愛着を持っているのかということに関するデータをご紹介しますと思います。

実はこの数年間、ここ5～6年間と言っていいんでしょうか、その間、メディアでも、研究者の間でも、あるいは評論家たちの間でも、若者の中では地元志向が強まっているというふうによく言われてきました。つまり、生まれ育った土地から離れたがらない若者が増えてきているということです。そういう若者が増えてきていると言われてきました。実際、私も地方の中小都市に行って、そこで高校生や大学生にインタビューする仕事をやってきているんですけども、ずうっとここに住みたいという人は結構多いなという印象を受けます。その理由として、後でデータでも確認されるんですが、頻繁に挙がるのが友達がここにいるからということです。友達がいるので、離れたくないと。東京とかに出ていったら、遊ぶ相手がいなくなっちゃうからみたいなことを言う子どもたちもいます。

とりわけ、例えば東北のずうっと北のほうのある市でインタビューしたときには、その市ですと、勤め先があんまりないんです。ですから、例えば仙台とか、あるいはもっと離れて東京とかに出てしまったほうが、経済的には多分、有利な状況が得られると思うのですが、そういうことを指摘しても、そうはいつでもやっぱりここがいいということ言う子もいたりして、そういう意味で地元志向が強まっているのかなというふうに私も思っていました。

これはある意味では確認されますし、今から見るんですが、言われているほどではないかもしれないという両方のことが言えるかなと思います。

まず、ストレートに、今住んでいる地域に対して愛着を感じていますという質問をしてみるとどうなるかという話からいきたいと思います。

最初のグラフです。これは私がやった調査で、杉並区なので、これは難しいところですね。杉並区で調査したから、こうなっているんだということもあるのかもしれませんが。例えば神戸市で同じ調査をやったんですが、神戸市の愛着度は高いです。神戸市の人は神戸がすごく好きなんです。だから、この種の調査はどこでやったかによって、やや数字が違ってきます。ただし、このグラフ以外は、あとは全部全国調査で、全国の平均値で出ていますので、そういった地域による偏りは相殺されていると思います。とりあえず杉並区では、好きだという人がかなり多いです。これを見る限りは、9割近い方たちが「好きである」「まあ好きである」というふうに答えています。

では、全国版ではどうかということですが、下に4つグラフが並んでいます。上の段のグラフは内閣府が行った青少年の生活と意識調査という調査からの抜粋であり、下の段は世界青年意識調査という調査からの抜粋です。両方同じ質問をしているんですが、対象者が、先ほども申し上げたように、年齢層がやや違っているところもあります。それを反映してか、結果も若干ずれがあるんですね。

まず、上の段の左のグラフを見ていただきますと、住んでいる地域に対して「好き」「まあ好き」「あまり好きではない」「嫌いである」という4つの中から選ばせるという質問をしてみると、「好きである」というのと「まあ好きである」というのがやっぱり多いです。2つあわせて8割ぐらいです。なので、地元への愛着といいますか、地元志向はそれなりに強いし、それから強まっているとも言えると思います。といいますのも、右側のグラフを見ていただきたいんですが、「好きである」という数字と「まあ好きである」という数字を足し合わせたものを図示しますと、なだらかではあります、増加傾向を示しています。1970年から始まって、2000年に至るまで30年間の間、緩やかに増大しています。ですから、地元志向が強まっているというのは、その限りにおいてはおそらく正しい。

ただし、もう一度左側のグラフを見ていただきたいんですが、「好きである」と「まあ好きである」の数字が2000年に逆転しているんです。つまり、「好きである」といっても大好きなのではなくて、「まあ好きである」ということです。地元志向というのは、ものすごく熱烈な人が増えたのではなくて、「まあ好き」な人が増えた。非常にライトな、軽いものであるというふうに考えておいたほうがいいかと思います。ですから、地元志向といっても、地元を熱烈を愛しているわけではなくて、「まあ好き」かなという程度の人が増えたのだと理解しておくのが正確なのだろうと思います。

同じようなことを世界青年意識調査についてもやってみますと、ほぼ同じ結論になるんです。つまり、「好きである」というのと「まあ好きである」を足し合わせて傾向を見てみれば、緩やかに増大している。その意味では地元志向が強まっている。けれども、もう少し細かく見てみると、「好きである」と「まあ好きである」が逆転しているんです、2003年に。こちらは2003年が最新データですが、ここで増えたのは熱烈に好きな人たちではなくて、むしろ軽めに好きな人たちであるということが見てとられるということになります。

なぜここで軽めに好きな人のほうが増えてしまったかについては、いろいろな事情が重なっていると思うんですが、1つには、このレジュメには書きませんでしたけれども、地域経済、地方経済の疲弊ということがあるだろうと思います。つまり、端的に言って、地元に残りたいと思っても、仕事がないというケースが増えてきているんです。ですから、熱烈に好きであるためには、そこに位置づけられるという客観的な条件が必要なんだろうと思います。ここでは居続けるための経済的な基盤がなくなっているという事情を反映して、「まあ好き」という人が増え、逆に「好きである」という人が減ったということがあるのではないかと。私としてはそう推測しております。ほかにもいろんな事情があると思いますが、そういう事情も大きいのではないかと考えているわけでありませう。

同じように地元志向をはかるためによく用いられる質問として、ずうっとここに住んでいいですかという質問があります。いわゆる永住意識と言われているものですね。これを見ますと、これもなかなか微妙なところがあります。

まず1つ目は、生活と意識調査ですが、「住んでいたい」「どちらでもよいか」「引っ越

したいか」という3択で聞いています。そうしますと、「住んでいたい」がちょっと複雑な動きをしているんですが、70年代に上がり、80年代以降は緩やかに下降していたんですが、2000年代に再度上昇しているという傾向が見られますので、地元志向が強まっていると言えなくもないです。しかし、他方では、実は引っ越したいと思っている人が増えているんです。それも90年代の後半に急増しています。そして、最新データである2000年においては、実は住んでいたい人よりも多いんです。

じゃ、何が減ったかというのと、「どちらでもよい」という中間派の人が激減しているんです。中間派が減り、住んでいたい人とすぐにでも引っ越したい人に両極化している。そして、単純に数字だけを比べると、実は移りたいと答えている人のほうが少しだけ多いということになります。おそらくこれも先ほど言ったような事情と関連して、住み続けようと思っても住み続けることができない状況が各地におそらく広がっているんだろうと思います。

小金井市にはこれはあまり関係ないかもしれませんが、例えば東北、北海道、九州、四国などに行きますと、地方の経済というのは非常に悪化しておりますので、そこに居続けることがそもそもできないんです。生活するために出ていかざるを得ないということが、おそらくあるのだろうと推測されます。

同じように世界青年意識調査のほうでもこの永住意識について聞いているのですが、こちらもやや両義的などちらにも解釈できるような結論になっておりまして、まず住んでいたいという人は90年代以降増えていますので、永住意識が強まったと言っているかと思えます。こちらが不思議なのは、移りたいという人が減って、安定しているんです。なので、同じ質問をしているんですが、しかも内閣府がやった同じ質問項目、言葉で聞いているんですが、生活意識調査と世界青年意識調査で結果が違っているんです。この移りたいという選択肢に関してだけは結論がちょっと違っています。ただ、住んでいたいという人も90年代の後半以降に増大しているんですが、実は2003年に若干減っています。ですから、地元志向が強まったという解釈もできますが、強まって、今は弱まっているという解釈もできる、いわば両義的なデータだと言えらると思います。

決論的に言えるのは地元志向、つまり地元を愛し、地元に住んでいたいという若者が90年代以降増えてきているということはできるけれども、それには限界があって、好きだと言っても、その好きな内容は軽くなっているかもしれない。それから、住み続けたい人が増えていても、同じように移りたいという人も増えているということです。なので、地元志向は両面性を持っているということが言えるんじゃないかと思えます。

とりわけ小金井市との関連で指摘しておかなければいけないのは、若者が移りやすい存在であるということです。小金井市内に幾つも大学はありますが、ここで暮らしている大学生たちはおそらく4年間なり、6年間なりの学生生活を終えると、どこか別なところに引っ越してしまうわけです。その意味では移りやすい人たちです。ですから、移りたいという選択肢をとりやすい人たちであるということだろうと思うんです。この「住んでいたい」か、「移り

たいか」というのは結構移動の自由に制限されるところがあって、移れる人は移りたいという選択肢を選びやすいというところがあるわけです。もう移れないとわかっていたら、例えば私も小金井市内に職場にあり、小金井市内に住居を構えているわけで、聞かれたら住んでいたいと多分答えると思うんです。小金井市に不満はありませんけれども、仮に不満があっても、ある意味、移るのは現実的じゃないよなというふうにと考えるとと思うんですが、若者の場合は嫌であれば、すぐ移れるというフットワークの軽さが信条であるというところがありますので、この移りたいという選択肢をとりやすいところがあるのは注意しておくべき点かと思います。

それで、地元志向が一応強まっていると見られる点もあるということなんですが、なぜ地元を愛するのかということです。これもまた結論から申し上げますと、地域を愛する理由の最大なものはその間に友達がいるからです。先ほどインタビューのお話の中で少し紹介しましたがけれども、確かにインタビューをしてもこの答えは一番多く出てきてます。実際、調査をしてみても、理由として友達がいるからと答える人が1番、6割近くの人がそう答えているということです。

この点との関連で、現在の若者について若者の意識とか人間関係について注意を促しておきたい点として、若者の友人関係は希薄化していないのだということがあります。一般に何か少年犯罪、センセーショナルな事件が起きるたびに若者の人間関係が希薄化しているおかげでこういう事件が起きるんだということが繰り返し言われますけれども、実際に各種の調査を見ても、また私自身がやった調査の結果を見ても、同じ結果が出ています。その同じ結果というのは、友人関係はむしろ濃密化しているということです。例えば友人の数は増えています。それから、どんなときに充実していますかという質問をよくするんですが、友人といるときに一番充実しているという若者の数は80年代以降上昇の一途をたどっています。同じように友人関係にどれくらい満足していますかという質問をすると、この満足度も80年代以降一貫して上昇傾向を示しています。

その他にもさまざまなデータがあるんですけども、全体として見たときに友人関係は希薄化しているというよりは、むしろ濃密化していると見たほうが素直であるということです。ただし、ご注意いただきたいのは、だからいいという話ではないです。むしろ濃密化しているから、苦しいというところもあります。これは我々大人も同じだと思いますが、あまりにも濃密な関係は逆に苦しいんです。例えば私の場合であれば、家庭教師で見知らぬ子どもに勉強を教えるのは何の腹も立たないんですけども、妹に勉強を教えたときには大変に腹が立つというんでしょうか、自分の子どもに勉強を教えるともものすごく腹が立つんですけども、人の子どもに勉強を教えるとあまり腹が立たないという経験はあるんじゃないかと思うんですが、つまり濃に密な関係というのはトラブルをそもそも見やすいものなんです。感情が深くかかわり合っているんで、行き違いが起りやすいし、ちょっとした些細な行き違いが大きな感情的なトラブルにつながりやすいところがあります。

それから、現在の若者、特に中高生の人間関係の濃密化の一つの悪いあらわれ方としては、

過剰な同調圧力、あるいは過剰な空気読み圧力というんでしょうか、空気を読めよという圧力が過剰に働いているということがあるだろうと思います。これは中高生のみならず大学生もそうだと思うんですが、周りの空気を察知し、それに合わせていかなければいけないという強い圧力が働いています。私とか、もっと上の世代の方々との大きな違いは、もともと日本人はそういう民族なんだという言い方もできると思うんですが、我々のメリット、上の世代の人たちが救われているのは型があるからなんです。例えば手紙を拝啓から書き始めるとか、あるいは目上の人には敬語を使うと。敬語には謙讓語とか尊敬語があるとか、我々には従うべきルールが明確にあるんですが、若者の場合はそういった枠組みを全部取り払った上で空気だけを読めという圧力になっているわけです。だから、何に従えばいいのかよくわからない状態で、空気だけを読まなきゃいけないことになっているので、とても苦しい。我々の世代は空気を読めない人も手紙の書き方を学べば、それなりのものを書くことができるという意味でお手本がある世代なんです。今の若い人たちはお手本なき人間関係の時代というふうに言うことができるのかもしれない。

なので、友人関係というものが、彼らの生活においてずば抜けて重要なものになっていると思います。そして、地元、あるいは地域というのは、そういった友人関係と表裏一体のものだからこそ愛されるところがあります。地元が好きなのはその土地がいいから好きなのではなくて、その土地に友人がいるから好きなんです。逆に言えば、友人がみんな出て行くんだったら、自分も出ていくという話になるだろうと思います。あるいはこういうことが言えると思うんです。地元でみんな遊んでいるうちは地元にいるんですが、遊ぶ仲間が別のところにできてしまうと、そっちが別の地元、第2の地元になります。そうやってつくられた第2の地元が渋谷だったり、池袋だったりするんです。池袋がホームであるという言い方をする若者は結構いるんですが、あるいは渋谷がホームである。ホームというのはある意味では地元なんです。それは彼らが住んでいる、生まれ育った地元という意味ではなくて、友達がいて、いつもそこに遊びに行くという意味での地元。その意味では第2の地元みたいなものだろうと思います。なので、友人と表裏一体なので、友人ネットワークが移動すれば、地元関連のほうも一緒に移動してしまうということがあると思います。

そして、それとはまた逆に、友人がずうっと居続けるのであれば、僕もずうっと地元にいますという若者が多いということも事実としてあるんだろうと思います。ただし、事実としてあるといっても、先ほどから繰り返し述べているように、いたくてもいられないということがあり、幾つかの研究によると、こういった友人ネットワークにつながっていたがゆえに、地元に残るとということが若者をフリーターにしていく一つの動因になっているんじゃないかという指摘もなされています。これは具体的には、例えば千葉県の事例なんですけど、千葉県の友人ネットワークの調査で、東京に行けば幾らも仕事があるのに、友達と離れるのが嫌なので、地元で仕事をしたいと。だけど、地元には仕事がない。なので、ずうっとフリーターをやっていますという若者の事例というのがあります。

しかしながら、ここまで申し上げてきたのは、いかに友人関係が濃密であり、彼らにとってそれが重要で、彼らがそれを維持するためにどれだけ努力しているかというお話だったんですが、友人関係以外の関係については極めて冷淡なところがあります。先ほど世代間差異が縮小したがゆえに、世代内差異が前傾化してきたという話を少しいたしましたけれども、友人以外の人間との協力形成については極めて冷淡です。それを直接示す証拠はなかなか難しいんですが、間接的に言えば、組織への加入率がだんだんと下がっているということがあります。私の勤めている大学でいいますと、まず部活に参加する学生の数が減っている。これは70年代から一貫して減り続けています。部活って運動部とか、いわゆる部ですね。80年代には部を離脱してサークルに移動したんですが、今はそのサークルもだんだん人が減ってきて、困っているんです。でも、サークル活動も成り立たない大学というのは全国には結構あって、文部科学省からは大学教員も頑張るってサークルにテコ入れするように努力せよなどといったお話が来るぐらいサークル活動が衰退しつつあるということです。

私、実は同じ調査を韓国でもやっているんですが、ソウルと東京との比較でいうと、若者のそういった集団活動で何が一番大きく違うかという、日本の集団活動は際立って学校に偏っているんです。つまり、韓国では部活には参加していないけれども、地域の文化活動とか、スポーツ集団に所属している子が結構いるんですが、日本の場合はそれが非常に少ないんです。ほとんど学校の部活に回収されてしまっている様子が見てとられます。なので、高校まではそうやって教育的な指導で部活に回収されているんですが、大学に来るとどこにも所属しないという若者が結構いるということがあります。それから、就職した後に所属すべきところもあまりない。企業のサークルに所属している若者も、数からいえば大変少ないです。それから、集団ということでは、労働組合の加入率、組織率も今非常に低くなっております。そういった形で、友人関係はとても大切なんだけれども、友人以外の見知らぬ人間と協力して何か社会的な目標に向かって頑張らしようという意識は大変希薄になっていることが言えると思います。ですから、これもまた市民参加を推進する側から見ると、あまりいい状況ではないかなということなんです。

最後に現在の関心ということで、社会的自立に関する調査からの抜粋ですが、どういうことに関心を持っているかということで、断トツなのが身近な人間関係を大切にしているということです。このことは身近じゃない人間関係に対してはあまりエネルギーを払わないということと表裏一体になっているということをお話しさせていただいたわけでありまして。

とりあえず私のほうからの話は終わります。

◎坪郷委員長　ありがとうございます。今、データをもとにして、市民参加の前提となる論点ということで、いろいろ興味深いお話をお伺いしましたので、このデータ、先ほど投票率などのお話、資料もまとめていただいていますので、改めてこれから30分か40分ぐらいは議論が十分できると思いますので、まずご質問も含めて委員の皆さんのほうからいろいろ出していただいて、議論をしたいと思います。

◎持永委員 投票率が低いというその分析が始まったら、大変な作業になってしまうんですが、今、浅野委員が現在の若者の動向を極めて細かく正確に分析していただいているなという思いです。今月の14、15の土日なんですけれども、東京経済大学で環境博があったんです。その環境博の行事の中にシンポジウムがありまして、国分寺と小金井のまちを元気にするというシンポジウムがあったんです。私、それを見させていただいて感じたんですけれども、提案する主催者は東京経済大学の学生なんです。小金井と国分寺に分かれて、それぞれ発表したわけなんですけれども、数カ月費やして非常に細かいデータと聞き込みと、私もびっくりするぐらいの情報を駆使しながら活性化を訴えたんです。

これは長くなるといけないんですけれども、例えば武蔵小金井の駅前北口に大きい駐車場がありますでしょ。あれがもうすぐなくなるんですって。所有している不動産会社の人が何か建てるので、自転車をどこかへ持っていかなきゃいけない。そういうことを取材してくるんです。そんなことはあるのかなと思ったんですけれども、どうするかという話。それを地域の活性化と結びつけて、見事な対処方法を発表するんです。

それから、東小金井の南口の商店街、これが活気があるんだかないんだかわからない。全部ばらばらだと。だけど、よく見てみると、異文化の食べ物屋さんがある。ここに着目して、これを市内へはもちろん、市外にも訴えてお客さんが来るようなイベントができないか、また行事ができないかというのを、述べているんですね。その発表が終わって、同じゼミの先生なんでしょう。4人ぐらいの教授がそれぞれ痛烈な批評をしてやっつけるのがおもしろくて、それで今度は全体のディスカッションになっていく。もちろん国分寺の駅前の箱ものはやめるとか、そういう話も出てくるんですけれども、東京経済大学のたとえ授業の一環としてでも、これだけ地元で熱意を持って活性化を訴えていくということで、これは無視できないなと思ったんです。

その学生たちと懇談をしたんですけれども、学生の市民参加についてどう思うかという話を聞きましたところ、非常に興味を持って聞いてくれたんです。しかし結局、余裕がないという話になりました。報酬も出ると言ったら、それには、興味を示しました。この今日配られた資料の地元野菜の件にしても、若者が結構地元に対してかかわっている、それで成果を発表したいという気持ちがあるんです。これを我々推進委員会が、あるいは行政の方々がしっかり見つけて、若者が動いているのをキャッチしてあげる、情報をキャッチしてあげる。若者というものを焦点にしたときに、熱意を持ってその人たちを顕彰してあげたら、随分また違うんじゃないかなと思うんです。

もう一つは、学芸大学の東門の前にコンビニがあるんです。これは引っついて大学が施設を持っているんです。それによってサークルの人たちが自分たちの研究成果を発表しているんです。これは私は非常に楽しみで、学生さんたちとよく懇談したりするんですけれども、話を聞いてあげるとすごく喜んでくれるんです。だから、こういう行事をコツコツ学生さんたちがやっている、市民参加というふうになるかどうかわかりませんが、市民の中へ飛び込んで

いって、学生さんが自分たちを主張しているということに地元がどう反応しているかということが問題なんです、インターネットとかで市がそれをバックアップしてあげる、宣伝してあげる、宣揚してあげる、顕彰してあげると。そういうふうになっていくと、若者がもっともっと地元に着着を持って振り向いてくれるんじゃないか、集まってきてくれるんじゃないか。だから、一概に若者対策という、若者はやらないぞ、市民参加なんか興味を持ってないんだというふうに決めないで、よく目を凝らしてみると、学生ですから、4年間は少なくとも地元で何かしらの役に立って、それで卒業していく。地元で長く住みたいか、住みたくないかということも聞いてみたんですけども、小金井にとどまる気持ちはないというふうに言っていましたけれども、ただ、4年間だけでもキャッチしてあげると、かなり新しい小金井ができ上がっていくんじゃないかなという気がしましたものですから、お話し申し上げたんですけど。

以上でございます。

◎坪郷委員長 ありがとうございます。じゃ、何人かのご意見、ご質問などを発言していただいて、関連で浅野委員にもう少しまたお話ししていただくということで、ほかの方。はい、どうぞ。

◎内藤委員 浅野委員のお話は大変興味深く承りました。ただ、小金井の場合、私の住んでいる周りはほとんど若者と言われるような人はいなくて、みんな外へ出ていっちゃっているんですけども、その辺のところはどのようにとらえておられるのかお聞きできればなど。ほとんど高齢化した老老介護、認認介護みたいな住まい人が多くなってきていまして、若者はどんどん出ていっちゃうんですけども、その辺はどうとらえていますか。

◎浅野委員 どちらかという日本全体で見れば、そういう地域のほうが数としては多いんだろうと思うんですけども、小金井の場合、先ほど人口構成をお示しいただいたんですけども、近隣の地区と比較してみないと何とも言えないんですが、これは推測なんです、外れているかもしれないんですが、若者の年齢をどこからどこまでにするかというお話をさっきしたんですね。それで、ここでは15歳から29歳としたんですが、最近はまだ少し後ろまで若者にしちゃうケースが出てきています。例えばフリーターというのは若者の問題だとされていますが、あれは35歳までなんです、定義上。ですから、30代前半ぐらいまでは若者だと考えると、実は学生時代を終えて、サラリーマンの初めの段階を終えて結婚した人たちが実は30代前半で住んでいるというケース結構あると思うんです。そのことが、だから待機児童の問題なんかにもつながってくるんだろうと思うんですが、そういう意味では若者というのを学生だけじゃなくて、勤めている若者、20代後半から30代前半ぐらいの勤め人というところも焦点に入れていく形にすれば、あながち移動していく人たちばかりではないかなと思うんですけども、ただ、全体として見れば、若者人口自体が減っていますので、流出していくというよりは、そもそもその世代の人口自体がどんどん減っていますから、少なくなっていくという傾向は多分とめようがないと思います、これから50年ぐらいは。

◎内藤委員 住居の住宅の問題も絡むというのが。

◎浅野委員 といいますのは。

◎内藤委員 大きくなってくると、部屋数も少ないし、まことに現実的な話で申しわけないんですけども。

◎浅野委員 確かにそうかもしれないですね。

◎内藤委員 緑町で運動会なんかをやっても、若い人たちに手伝わせそうと思っても出てこないし、いないんですよ。

◎浅野委員 その問題は都内でも、多分、いろんなところで起こっているんじゃないかなと思うんです。伝統的な祭りが成り立たないというのはいろんなところで言われていて、それこそみこしのかつぎ手がないという話から始まって、もう少し地方に行けば、青年団なんだけれども、一番若い人が45歳とか、全然青年じゃない青年団みたいなのが各地にあったりして、そういう問題は多分、小金井市だけではなくて全国にあり、かつこれからますますそういう問題が大きくなっていくだろうと思います。

◎内藤委員 消防団を探すのにも委員さんが四苦八苦しませてね。やっと欠員が補充できたというのが。随分苦労しました。

◎浅野委員 そうだろうと思います、ほんとうに。だから、若者自体が減っていて、かつ、そういうものに参加したい若者がまた減っているのも、ほんとうに候補者がどんどん縮小している状況だろうと思います。ですから、我々にできるのは、出生率を多少回復させても若者人口はそんなに簡単には回復しないです。例えば出生率を2ぐらいにしても大して回復はしないんです、実は人口自体は。なので、出生率を幾ら上げても、その結果が出るのは100年とか、それくらい先なので、我々の当面の目的にはあまり役に立たず、我々にできることはおそらくさっき申し上げた参加してないんだけど、参加する気はあるかと言われればイエスと答える3割ぐらいの人に対して何らかの働きかけをするということもあるかなと私としては考えておりますが、どういう働きかけをするのかというのは……。

◎内藤委員 一面だけとらえたので、ちょっと……。

◎浅野委員 難しいところがありますが。

◎内藤委員 難しいですね。ありがとうございます。

◎坪郷委員長 ほかの方。よろしいですか。はい、それでは。

◎森実委員 質問なんですけれども、10年とか20年単位で市内の人口は増えていますけれども、今は……。若干ですけども。僕は30年ほど住んでいますけれども、たしか30年ぐらいまでは9万台だったと思うんですけども、それが11万人になりまして、増えている部分というのは昔分析したことがあるんですか。どういう要因で増えているのか。

◎坪郷委員長 市のデータについてはどうですか。

◎天野企画政策課長 人口に関してなんですけど、今、人口は一貫して微増傾向にあります。その中でも年少人口は減少して、高齢人口は増加しており、少子高齢化が進んでいるところでございます。また、核家族化や単身世帯の増加により、人口の伸びに加えて世帯数が増えている

という傾向もございます。それから、小金井市の特性でございますが、転入者が転出者を上回っているものの、大きな人口の増減はございません。人口は毎年微増にとまっているということがございます。

また、昼間の流入人口よりも昼間の流出人口のほうが多く、言い方がちょっとあれなんですけれども、ベッドタウンとしての傾向がうかがえるというのが特徴でございます。

以上です。

◎森実委員 ちょっと感覚的な話なんですけれども、増えた理由の一つとなっていると思われるのは、市内の最大手のジャノメがなくなりましたね。なくなった後にマンションができたり、市も絡んだり、いろいろありますけれども、あそこに今まで住んでない人が住んできた。僕の周りにもジャノメの社員が住んでいましたけれども、半分ぐらいは転職して、そのまま市内に住んでいると思うわけです。これは感覚ですけども。あとの半分は市外に移った方が多いですね、職業が変わって。減ったんですけども、さらに新規参入者が入ってきたので、その分は多少老齢化を中和するようなことが例えばあったんじゃないかと思います。

いずれにしても地元には仕事がないんですかね。一番安泰な就職先というのは市役所ぐらいで、その市役所もこれだけ小金井市内の地価が高くなっていますので、この前、市長にお聞きしましたら、市内から採用する新職員といいますか、新しい職員の方も全員が市内から採用しているわけではない。市外からも相当入れないとやっていけないと。理由の一つとして、やっぱり地価が高い。地価の低いところから市役所に就職していらっしゃる。失礼な言い方だと思うんですが、そういう方のほうがかえって優秀だという話もお伺いしましたけれども、住宅というのがどうもキーになっているような感じがします。住宅地が生活基盤。職場は、市役所の方が地元志向ということなんでしょうけれども、人口の大半の方は都心に出ていかれる。何か手法をつくといいまして、相当難しい話になる。住宅地であるということは、逆に売り物にしてやっていかなきゃいかん宿命なんじゃないか。

もう一つ、きょう市報か、さっき持ってきていただいた市の情報を見ますと、空き家が5,000戸市内にある。私は今、留学生とちょっとかかわっておりますけれども、この資料ですと、外国人が全部入れても2,500人だと。住宅をキーにしたアイデアをいろいろ考えています。

いずれにしても、今、スタートしていますお野菜の話とかはすごくいい話だと思うんですけども、活性化の呼び水にはなりますけれども、若い人のマインドを変えるところまでなかなかいかないです。工夫して、新しいプロジェクトをもう少し数をつくってやっていかなきゃいかんのじゃないかなと思います。

◎坪郷委員長 どうもありがとうございました。幾つかご意見とご質問が出ましたので、浅野委員、いかがでしょうか。大学の学生が地元志向でいろいろな地域活性化のプロジェクトがあるという議論もありましたし、住宅市場とか空き家の問題というのは今注目されている一つだと思うんですけども、それを使って何かできないとか、あるいは学生がどれぐらいの運動

をしてきているのかどうかということもあるかも知れませんが、商店街の問題といろいろ出ましたが、きょうの報告と関連づけると如何でしょうか。

◎浅野委員 きちんと全体を整理してお話しすることが難しいんですが、住居に関しては、今、若者に対する政策の中でも全体として重視されている部分ではあるんです。つまり、我々が考えている市民参加するかしないかというレベルというよりも、もう少し前の段階で、つまりネットカフェ難民とか、あるいは野宿者になってしまう若者とか、そういう者が数としては増えていると言われていて、そういう人たちに対してまず住むところを与えるというのが最低限の範囲だろうということで、若者政策の一部として住居を与えるということがとても大切なんじゃないかということが言われ始めています。だから、その観点がとても重要だなというふうに思いながら伺っていました。

5,000戸というのは、私も今、数字を聞いてちょっとびっくりしたんですが、そんなにあるんだなと思ったんですけども、住宅とか住居をキーワードにして若者を引きつけるとか、あるいは引きとめるといった発想は確かにあり得るかもしれないですね。今、具体的にどういう魅力を発生させるかというアイデアとかはすぐに思いつかないんですけども、確かにそれはキーになり得る、軸になる一つのポイントだろうなと思いました。

それから、労働するためにみんな外に出ちゃうんですけども、ただ、生活はやっぱり小金井市でやっていますので、生活するということと土地との結びつきが一番即物的にというか、具体的にあらわれてくるのは子どもだと思うんです。子どもが生まれてしまうと、どうしても土地とそこに住んでいる人たちとの間に関係を持たないわけにいかなくなってくるので、子どもを育てることが一つ、働くということとは別に子どもを持って育てることが土地と、つまり小金井市という場所とそこに住んでいる人を密接に結びつける一つのキーになるのかなと考えています。ですから、昼間はみんな都心に出ていってしまっても、やっぱり暮らしているのはここですので、暮らしているという側面を自覚してもらうには、子どもというのは非常にいいメディアになるかなと思いました。

あと、大学生に関していうと、先ほど持永委員もおっしゃられたように、今の大学生はまことにもって余裕がないといいますか、例えばうちの大学ですと、就職入門のガイダンスみたいなのを2年生にやるんです。3年次の後半には就職活動が始まるんです。時間のかかる学生ですと、4年の後半までかかるんです。だから、3年次の秋から始まって、4年の秋でやっと決まるという学生もいて、とにかく就職活動のおかげで大学教育はかなりずたずたにされているところがあり、その上、市民参加もやってくれと言われると、大学生は多分、もうこれ以上できませんという人たちが多いかもしいかなと。まじめな学生であればあるほど、そういうふうに感じてしまうところがあるのかなとったりもいたします。だから、そのところを考えつつ、もう少し参加の敷居を下げる、あるいは参加しやすい形態を考えるといったことが必要になってくるのかなと思います。

それと関連して、市民参加というものが、あまりそもそも論をやってもしようがないかなと

も思うんですが、若者の市民参加を推進するときに、一体どういうことを具体的に想定するかという問題があると思うんです。いろんな取り組みの事例があって、私の見た中で一番踏み込んでいるなと思ったのは京都市の事例で、これは政策決定の過程に若者を入れちゃうんです。こういうところにほんとうに呼んじゃって、言わせたことをほんとうに政策に反映させ、それを検証するための組織もNPOを媒介にしてつくっていくことをやっているんです。そこまで踏み込んでやるのか。それとも、もうちょっと緩いマイルドな形だと、例えば徳島県とか高知県がやっている、まちを盛り上げるためのアイデアを若者に出してもらおうというアイデア募集型のやつですとか、これからの〇〇市の10年を市長と語るみたいな感じの市長との懇談会みたいな形で意見を言わせるとか、そういう非常に緩やかな形まで、いろんな形があると思うんです。だから、我々も若者に市民参加をさせるという場合に、どういうレベルのことを想定するのかというイメージをだんだんと絞っていったほうがいいのかという印象は持ちました。ほんとうにいろんな取り組みがあって、それこそ非常に簡単にできるものから、京都市の場合のように相当ちゃんとやらないと難しいのかなというものまで、いろんなレベルがあると思います。

◎坪郷委員長 ありがとうございます。

◎持永委員 若者の市民参加の事例ですね。これは各自治体もいろいろ論じているんですけども、これとといったいい考えがなくて、半ばほったらかしになっているわけですけども、さっき京都の話がされましたが、身近に僕はこれはいいなと思った例が1つありまして、これは藤沢市なんです。藤沢市で若者というより、むしろふだん地元にはいない層ですね。通勤で出て帰ってくるという人たちをとらえた市民参加というものをどうするか。それがあそこに慶応大学の藤沢キャンパスがあるんです。そこと相談したようですね。そこにその分野の権威である金子先生が自分の教え子全員を使って、いろいろ実験を始めたんです。それは市民IT会議室というのをつくったんです。最初、実験で、課題は、資料がたくさんあるんですけども、市から出た問題、市民から出た問題、その会議室を2つ設けまして、市から出た問題はこういう議題をやりたいんだと。今度は市民のほうは、こういう議題をやりたいんだということを発表するわけです。発言する人は登録制になっていまして、身分がはっきりしているわけです。きのう、藤沢市の担当の人に電話して聞いてみましたら、今でも3,500か、3,800名が応募していると言っていました。それで、どういう人たちがここに参加しているかというデータがあるんですけども、特に若者を意識してつくった加入数ではないんですけども、登録者の年代別割合というのがありますが、20代が24%、30代が33%。これだけで60%近くいくんです。40代が18%。50代、60代となってくるにしたがって、参加者が少なくなってくるんです。特に30代、20代の人たちの意見が非常に活発だと。最初は画面上で会議をやっているわけですけども、その時間にインターネットを外れてみんなで語り合おうじゃないかということで、あるところに集まってその人たちが検討している。それは市のほうに非常に熱心な人がいまして、いろんな政策をする上において幅広い意見が欲しいということ

で、特にこの電子市民会議というのを重視して、結果をやり取りを受けている。それが市政にかなり重なっている。資料があればいいんですけども、そういう事例があったんです、藤沢市で。これを金子先生が始めて10年たつんですけども、ほとんど市が主催して運営しているんですけども、いまだ参加する人は増え続けているということが、市民にとっても、必要性があると。行政にとっても必要性があるという、行政も市民もともに必要性があるがゆえに登録者が増えている。これは私たちもインターネットで見れるんです。議題の中にはいろんな意見があるんですけども、こんなのが市政かなと思うようなものもあるんですけども、どんな人の些細な問題でも扱っているんです。藤沢市としては委員会とか審議会とか、あるいはいろんなパブリックコメントとか、いろんな集会とかもやるんですけども、集まってくるのは大体50代以上です。年配者が多いです。この若い人たち、あるいは流動的に出たり入ったりする人たちをこのIT会議がキャッチしたんです。

ですから、こういうことも若い人たちに門戸を開くというんですか、今の市民参加推進会議の内容をひとつ越えてというんですか。これは発想が慶応義塾大学の藤沢キャンパスですので、そこからの呼びかけだから、僕は若者が集まってきたんじゃないかと思うんですが、小金井市においてもそういう若者、あるいは30代、40代、この人たちとのほんとうの意見を伺うための方策としては、思い切ってそういう門戸を開いていいんじゃないかという感じがしたんです。実際、インターネットで見れば非常におもしろいです。

以上でございます。

◎坪郷委員長 ありがとうございます。

◎境委員 そういう活動をやっているのは、曜日とか、時間とか、そういう……。

◎持永委員 もう関係ないです。だから、夜が多いんです。夜、皆さんが帰宅して、その後、ページビューになります。だから、それは藤沢市にとっても、どちらかという一つは意外な結果なわけです。ですから、それを公表しているわけです。これはご存じの方もいらっしゃると思うんですけども、金子先生が書いた本が出ています、岩波から。

◎坪郷委員長 今の20代は高校ぐらいからインターネットを始めている世代ですから、インターネットを利用すると、20代、30代前半あたりはとりわけ反応があるというのはいろんなところで言われていることですね。

◎浅野委員 ネットの活用は、有効に活用すれば非常にいい結果を生み出すと思います。ただ、管理が難しいだろうなど。つまり、この場合、慶応のSFCのキャンパスがあり、金子先生はネットワーク利用の専門家でもあり、そういう実践もかなり積まれている方なので、そういった人間がいてこそこの話かなと。組織のリソースとそういう個人のリソースと両方あわせて、かつ藤沢市というある種のブランドみたいなものもあり、そういう条件の重なり合いの中でうまくいっているところがあると思うので、逆に小金井市でやるときには、小金井市なりの強みを発見して、それをインターネット等になじませていくということ、そういうステップが必要になると思うんです。そこは可能性はあるんですけども、具体的にどうすればいいのかという

ことはなかなかすぐにはアイデアが出てこないもので、もうちょっと時間をかけて考えてみたほうがいいかなという感じがいたします。

◎持永委員 こういう若者を市民参加させるというプロデュースが必要なんです。プロデューサーがいて、さっき言っていたような学芸大学の先生が講師になる。農工大にいらっしゃるかもしれない。電気通信大学にいらっしゃるかもしれない。そういうこともやってみる感じはあるんじゃないかと思うんです。

◎浅野委員 途中で小金井関係の掲示板やチャットというのは多分あって、例えば小金井市内のお母さん方の情報交換のための掲示板というのはもう既にあるんです。こがね一ぜとかっていう名前と呼ばれているんですが、どこの小児科がいいとか、どの小学校がどんな感じって情報交換をされていて、結構シビアな意見が書き込まれていたりもするんですが、そういった自主性的にというか、自発的に発生してきたネット上のコミュニケーションは、随分小金井市内にもあるんだろうなと思います。だから、逆に言えば、そういった既存の既にある場を我々としてどんなふうにバックアップしたりとか、あるいは提携したりすることができるかなというのが一つの課題になるのかなと思います。

あともう一つは、金子先生の一つの魅力はおもしろそうにやることができるということだと思うんです。実は若者の政治参加ということで調査をやったときに、若者の政治参加で一番特徴的なのは彼らは正義によっては動かないということなんです。むしろ、おもしろさによって動く。つまり、選挙の投票率でもなぜか2005年の総選挙だけは投票率が若者においても高かったのは、お祭りとしてあの選挙がおもしろかったからということだろうと思うんです。

あるいは若者はどういうときに政治性を発揮するかというと、お買い物をするときに政治性を発揮するわけです。つまり、倫理的・社会的な理由で物を買ったり買わなかったりすることがあるという若者は相当な数いたんです。いわゆるボイコット、あるいは逆にバイコットという言葉があって、例えばこの化粧品会社は女性が働きやすい環境を社内的に整備して、いい会社なので、化粧品を買うときはこの化粧品会社にしようみたいな物の買い方のことを、ボイコットの反対でバイコットというふうに言うんです。だから、ボイコット、バイコットという形で政治性を発揮する若者が実はだんだん増えてきているということがあって、買い物と表裏一体になっている。あるいはおもしろさが前面に出ている。そういった入り口があると、若者もそれなりに引きつけやすいということがあるんだろうと思うんです。だから、入り口の部分にふわっとしておく必要があるのかなという気がいたします。

◎坪郷委員長 選挙でも2005年度はどういう意味でおもしろいかというのはいろいろあると思うんですけれども、そういう引きつけるものがあったということと、それから最近は大学生の傾向でいうと、不況とか、就職難のときには投票数が上がっているんです。それは就職難というか、社会状況の問題があると、政治への関心が高まるという脈絡があるんじゃないかと思うんです。これも検証しないといけないんですが、経験的に言うと、大学の学生に聞いていると、そういうことなんです。そうすると、就職難のときにわりと政権党に批判的な票が出

るんですけれども、2005年のようにおもしろいと、つい政権党に投票してしまうとか、そういう若者の価値観というものがどういうところにあるのかという、今言われたように、おもしろさというか、バイコットという面ではいろんな倫理性、目的性があるわけですから、それはかなり多面的な形で価値観が構成されているんでしょうね。

あとはいかがでしょうか。

◎持永委員 私が言いたいことは、市政と市民とのよきパートナーシップを持って、市の行政を向上させていく。そういうことがこの市民参加条例の大目的ですね。ですから、市民同士でいろんな話をしているのは一向構わないんですけれども、市政がそういう人たちの幅広い意見をどう市政に生かしていくのか、政策に生かしていくのか。僕はここを言っているんです。だから、ほんとうに行政としても若者の考え方、意見、提案、そういうものを聞きたいのか、聞きたくないのか。そういうことも私は知りたいんです。それがほんとうに聞きたいとなれば、話はずうっと進んでいくんですけれども、難しいのではないのとなると、話が空回りしてしまう。

◎坪郷委員長 何かありましたら。

◎本多委員 浅野委員の若者のお話を聞いて、うちのほうも市役所の中で、組織の関係なんですけれども、今の経済状況もあります。新入職員の職員組合への加入率、入る人は少ないというところで、今の職員組合の役員の人たちは四苦八苦しています。私のときには高度経済成長で、毎年賃金が上がっていったので、組合に入っても一応一定の恩恵といいますか、組合費を払っていてもいいというところだったんですけれども。今は逆に賃金下がるという状況ですから。そういう点では浅野委員が今日話されたことで、そういった背景もあって組織活動とか、そういうのがずっと減ってきているのは、そういう社会情勢ともまたリンクしているのかなというところで、興味深くお話を聞いたところです。ですから、そこをどうしたらいいかなというところが気運も上がらない。それで、今の若者の就職の場がないというか、学校を卒業してもないというところですね。その点、ちょっと厳しい状況があるんだなというところがありまして、そこを若者が参加するに当たり、社会の経済とか、そういうシステムとか、仕組みを変えていかなければ、なかなか地域にも市民参加というか、定着は難しいのかなと、私は今、それを感じたんですけれども。

◎坪郷委員長 はい、どうぞ。

◎境委員 これはすごく小さな芽なんですけれども、市民参加をするという、水夫をつくるには私たちはどういうふうに知恵を使ったらいいかということで、小金井市にも学び講座というのがあるんですよ、たくさん。私もそういうサークルでそれを利用しているんですけれども、それを若い人たちに参加していただくのには土日とか、そういう日には講師派遣がなくて、聞いていただきたい講座はいっぱいあるんですけれども、なるべく若い人たちの世帯にビラを入れる運動なんかもやっているんですけれども、行政のほうから、千代田区のほうでは土日にそういう講座を開くというのをやっつけらっしゃるといって、青年会議所の会議に出たときに

ちょっとお聞きしたんですけれども、小金井市も土日にやっていただいて、私たちがそういう講座のスタート時点をつくると若い人たちが入ってきて、それから市民参加に持っていくという方法もあるんじゃないかなといつも思っているんですけれど。学び講座のすごい講座があるんですよ。皆さんご存じだとは思いますが、私どもサークルで2回しか利用できないんですけれども、選んで利用していて、なるべく若い人たちに出していただいて、やっているサークルも高齢化してきまして、そのサークルを若い人たちにつないで、またそれで市民参加してほしいなという考えを私どもは持って、今、皆さんのお話を聞いておりました。

◎坪郷委員長 ありがとうございます。

◎金子委員 市の方にまた嫌なことを言うことになっちゃうとあれなんです、持永委員の意見とも似ているんですけれども、私、4～5年前にNPOをつくったときに、こちらのNPO連絡会というのがありまして、その会合に何回か出ました。それから、2年ぐらい前ですか、協働の基本指針の設定ということで何回か会議に出ました。その2つであきらめかけちゃっているんですけれども、ほかの方々の意見の中にも入っていたと思うんですけれども、一番ポイントは当面の間は市がどれだけ主体的にリードできるかということと同時に、若者の場合もそうですけれども、若者なり市政との接点をどういうところに置こうとしているのか、場の設定をしていただきたい。

どうしても市民云々ということになりますと、市民というのは、極端に言うと一人一人、個人個人になっちゃうわけです。組織化するのには、かなり手間がかかるわけです。確かに武蔵野市が107名の市民会議だとか、三鷹市が云々という話はよく聞きますよ。だけど、そこまで持っていく当面の助走期間のリードを市がとってもらわないと、私は今の協働とNPOの両方を経験して、市が当面の間、主体性を持ってリードされるということと、モデルケースで結構ですから、接点の場の設定をトライアルして、失敗してもいいと思うんです。それを率先してまず、市のほうでやってもらいたいなと。

先ほど持永さんから、市でそういう市民の声というものを集約していますかという意見がありましたというのも、私はちょっとまた嫌な言い方になっちゃうんですけれども、ちょっとその辺が市として手ぬるいんじゃないかなと思う。今、NPOというのも五十幾つかあるんです、この小金井市には。だけど、登録しているのは、NPO連絡会という任意の団体があるんですけれども、二十幾つかですよ。実際に出ているのは12～13。私も最初の何回か出た後は、ぽつん、ぽつんとしか出ていませんけれども、この人たちがリードしてくればなという方々がおりちゃう、やめてしまう、抜けてしまう。加盟のNPOからは抜けないんでしょうけれども、メンバーとしては抜けちゃう、期待していたような方が。10年、15年前からやっておられるような方が何となく世話をやいてくれているんですけれども、なかなかそこには進化した跡が見えない。

これは私、2つのケースで感じたのは市のリードが足りないなと。最初だけでも引っ張ってもらいたいなと。その強力なリードがあれば、この小金井市民のことですから、必ずほかの市

に負けない、いろんな活動ができると思っています。

その話とちょっと違っちゃいますけれども、私はNPOのころからずうっと言ってきた、この小金井市の活性化のポイントというのは若者、産官学の連携。そして、小金井市なんていう小さい10万か11万の市で云々しているんじゃなくて広域化、隣の三鷹市と一緒になくても、国分寺市と一緒になくても、町田市でもどこでもいいですから、一緒になくてもやっていく。これだけ大きな都市の中で、小金井市11万で何かやろうといったって、なかなかそれは盛り上がりがないと思います。若者と産官学連携と広域化がポイントだと思っています。

先ほど浅野委員のお話を聞いていて、市民参加の前提となる若者の意識ということで、友人関係というものが非常にウエートが高いというので、がっくりしたんです。おそらくこうなったら、ちょっと小金井市は無理だぞという気が先に立っちゃったんですけれども、何とかその辺を塗りかえる場の設定、どういう場面を設定したらいいかということのために、こういうきょうの会議があるんだらうと思うんですけれども、これをもう少し強力でリードしてほしい。何年一緒にやっても進歩がない。嫌になっちゃう。私ももう言うまいと思ってね。

◎坪郷委員長 ありがとうございます。今のご意見もいろいろこれから議論を続けたいと思うんですが、市がリードしてほしいというのは意見としてはわかるんですが、市がリードできないという状況もあるかもわからないです。例えば協働とか、NPOの問題というのは比較的新しい問題であるので、必ずしもノウハウが蓄積されていないので、これもNPO主導型でできればいいんですけれども、なかなかそれもうまくいかない。市の主導もうまくいかない。そういうときに中間的な形で何らかの方式はないかというあたりを我々はいろいろ議論しながら、できれば少し具体化したものができればと。その中身の1つは例えばITを。ITというのも管理といいますか、主催者とか、責任者をちゃんと置かないとこれは運営できないので、その運営をどうだれがやるのかというのを浅野委員は指摘されて、一番難しいんですが、例えばそれを使えば、少し参加が広がる場所があるかもわからないんですが、それを具体的に立ち上げるのもかなり準備が必要だろうということで、いろいろ議論を皆さんに出していただきました。きょう発言されてない須内さん、何かありますでしょうか。

◎須内委員 私、すごく楽しかったです、きょうのあれが。バイコット、倫理性を持って買うと聞いたときに、自分も若者に入るなと思ったんです。というのも、そういうので買ったりします。小金井市は結構頑張っているなと思ったのは、こきんちゃん、これをつくったときに何だかなと思ったんですけれども、今やママ友もこきんちゃんバッジをつけていない人はいないぐらい、かなりこのゆるキャラは1年で浸透して、結構市民の中に入って、私、小金井に来る前に横浜だったんですけれども、横浜の前は国立で、インターネットで住みやすいまちって探したときに横浜と国立が出たんですけれども、子どもの学校のご縁ができたんですが、今はほんとうに小金井を愛しております、主人が神戸で、自分は高知県出身なんですけれども、ものすごい県民意識があって、愛着があって、高知でも今、ジャム屋とかいうことでニュースに載せても、ジャムをつくって、青年団が主催して、杉がすごく生えているので、杉の皮

のリサイクルでいろんなものをつくって、それは今、結構高いんですけども、かばんとかも。県民だから買うみたいな感じで注文したり、吉祥寺に行って高知県の食材を買うとかいう感じで、愛着があるんですけども、そういったことがほかに愛着を持った企業を起こしたりとか、そういう人なんかはチャンスというんでしょうか、そういうのもあると活性化するのだなど。若者が参加しやすいというんでしょうか。

先日も友人が何の関係もないんですけども、静岡県の主催のイメージしたフレグランス、においを調合するというので応募したら、入賞しまして、青い海をイメージしたとあって、じゃ、小金井をイメージして何かやってみなよみたいな話にもなったんですが、ほんとうに小金井を愛している人たちもたくさんいますし、自分のご近所でも大学が多いので、学生の方と知り合う機会も多くて、夏祭りなんかも焼きそばとかしかないのも、もっとおいしいものを立ち上げてやらないかというと、やっぱり消極的というか、食中毒があったらどうしようとか、いろんなことで結構及び腰で、いろんなアイデアは出るんですけども、参加までに至らないということもあります。今、皆さん参加したいという思いはあるんじゃないかなというふうに思いますし、小金井ブランドをぜひ全国に広めたいなと思っていますので、市民参加、若者参加というのはここにありますように野菜もつくれば、ルバーブという野菜で、ジャムをつくって方もいらっしゃるし、そういったことで提案して、だれでも参加できるような場があれば、結構ヒットするんじゃないのかなという面は感じています。

◎坪郷委員長 ありがとうございます。そろそろもう時間がなくなってきましたので。きょうは特に若者の意識との関係でいろんな事例も含めて出させていただきましたので、もう少し議論を続けたいと思うんですが、次回の議題としてこれを続けるということによろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

◎坪郷委員長 ありがとうございます。それで、先ほど浅野委員のほうからも京都とか徳島、高知ですか、幾つか事例をご紹介いただいたんですが、それをもう少し資料とあわせて紹介していただくことはできるでしょうか。

◎浅野委員 じゃ、させていただきます。

◎坪郷委員長 持永委員、いかがですか。藤沢の例の資料を幾つか代表的なものを添付していただいて。

◎持永委員 そうですね。きょうお配りしたいと思ったんですけども、話が長くなるので、やめたんですけど。

◎坪郷委員長 次回にその資料を用意していただいて、配って、それもあわせてということで、今回は具体的にほかの自治体でどのような若者の市民参加の事例があるのか議論したいと思います。きょうの議論は、いろんな皆さんのご意見とか、アイデアがありますので、議事録の作成と同時に、若者の市民参加でどういう論点があるのかというのは、私のほうで簡単な論点表ぐらいは、きょうの議事録を見させていただきながらまとめてみたいと思いますので、次回、それも配らせていただければと思っています。

じゃ、浅野委員、連続で申しわけありませんが、次もちょっとご報告をいただくということでお願いします。

◎浅野委員 はい、わかりました。

◎坪郷委員長 以上で、きょうの市民参加条例、運用状況の議題については終了させていただきます。

次に、次回の推進会議の日程について設定をしたいと思いますので、ここで会議の休憩をしまして、皆さんと日程調整をした上で再開したいと思います。

休憩をさせていただきます。

(休憩)

(再開)

じゃ、再開をいたしまして、次回の推進会議の日程は1月29日(金曜日)の午後6時からとさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

◎坪郷委員長 じゃ、それで設定をさせていただきます。

以上で、本日の議事はすべて終了いたしました。本日はこれをもって閉会いたします。どうもお疲れさまでした。

(午後8時00分閉会)

平成21年11月25日

平成21年9月18日

小金井市長 稲葉孝彦

市民参加条例第20条第1項の規定に基づく提言に対する意見について

平成21年8月28日付けで市民参加推進会議（以下「推進会議」という。）から提言のあった「小金井市市民参加条例の一部を改正する条例（平成21年条例第12号）付則第2項について」に対し、市民参加条例第20条第2項（現行条例第27条第2項）の規定に基づき、下記のとおり市長の意見を公表します。

記

- 1 平成21年3月14日開催の小金井市議会臨時会で議員提案により市民参加条例の市民投票に係る条項の一部改正が全会一致で行われ、常設型市民投票制度が導入されることとなりました。改正条例付則第2項は、市民投票に関する条例の制定に向けた準備という見出しで「市長は、広く市民の意思を反映させ、市民投票に関する条例の制定に向けた必要な措置を講ずるものとする」と規定されていることから、平成21年5月22日付けで市民参加推進会議に対して付則第2項の考え方、対応の仕方について提言を求める諮問を行ったところ、この度、市民参加推進会議から提言をいただきました。
- 2 市民参加推進会議からの「常設型市民投票制度を含む新たな市民投票制度検討のための附属機関等を立ち上げて議論を行い、必要な措置を講ずることを提言する。」を受け、市民参加条例の一部改正により平成21年9月1日に施行した常設型市民投票制度の状況を勘案しつつ市民参加による市民投票制度の条例化に向けた附属機関設置に必要な措置を講じることとします。

平成21年8月28日

小金井市長

稲葉孝彦様

小金井市市民参加推進会議

委員長 坪郷 實

市民参加条例第20条第1項の規定に基づく提言

市民参加条例第20条第1項の規定に基づき、下記の事項について別紙のとおり提言いたします。

記

小金井市市民参加条例の一部を改正する条例（平成21年条例第12号）
付則第2項について

(別紙)

小金井市市民参加条例の一部を改正する条例（平成21年条例第12号）
付則第2項について

1 経過

第3期市民参加推進会議は平成21年5月22日に発足し、同日市長から標記の件について小金井市市民参加条例（以下「条例」という。）第20条の規定による提言を求めるとの諮問を受けた。5月22日及び7月17日の2回にわたり審議した。

2 提言

- (1) 小金井市の市民投票制度は、平成16年4月1日施行の条例第16条で「市は、別に条例で定めるところにより、市政に関する市民投票を行うことができる」と規定し、市民投票制度が市民参加の方法に含まれるとして市民投票の条文を盛り込んだもので、同条例の策定過程からも常設型市民投票制度か個別型市民投票制度かを含め市民投票制度のあり方は今後の課題としていたものと推量する。
- (2) 平成19年1月発足の第2期市民参加推進会議においても市民投票について、平成19年10月30日開催の第13回推進会議から平成20年11月11日開催の第17回推進会議まで4度の審議を行い、「第6章の市民投票の趣旨のとおり現状のままでいく。」との結論であった。
- (3) しかしながら、今回、平成21年3月14日の小金井市議会臨時会において全会一致で条例の一部改正が行われ常設型市民投票制度の一部が条例化された。
議会の権能としての条例制定権に基づく条例改正であり、全会一致という結果から、議会の意思として常設型市民投票制度の導入は重く受け止めなければいけないものと認識している。
- (4) 市民参加推進会議は、市民参加条例の適正な運用状況を審議するために設置された附属機関であり、常設型市民投票制度の研究・検討、条例化を行う機関としては、時間的、予算的な課題等々から判断し、その任を受け持つことは困難である。
- (5) よって、市民参加推進会議は、市長に対し、小金井市市民参加条例の一部を改正する条例（平成21年条例第12号）付則第2項の規定を受け、常設型市民投票制度を含む新たな市民投票制度検討のための附属機関等を立ち上げて議論を行い、必要な措置を講ずることを提言する。

3 市民参加推進会議での主な意見（参考）

- (1) 市民参加推進会議で真剣に討議していることと関係なく議員の方々の発議で条例の一部改正が成立してしまうことは、推進会議の軽さ、無視を強く感じる。
- (2) 付則第2項は、そもそも常設型市民投票制度を含意しており、常設型をどう実現するかの枠内に議論が限定されている。今回の規定で十分にいろいろなことがカバーできているとは思えないので、別のものを作るほかない。
- (3) 過渡期の不完全な条例であるが議員全員で決めたわけだから市民投票条例はあったほうが良いという結論に達していると思う。これはある意味でいうと市民の意向だと思う。常設型か自治基本条例の中に組み込むか等は、審議会を作って検討すれ

ばよい。

- (4) 市民参加条例に基づき様々な手続を踏んで条例改正は行われるべきである。
- (5) 市民投票、市民参加は民主的でいいと思うが、情報があまり提供されない中でやると様々な問題が起きてくると思う。専門家を招いてそのことに対して何か解決に向けて検討するとよい。

年代別投票状況

(単位:%)

年齢	市議会議員選挙 (H17年3月27日)	都議会議員選挙 (H17年7月3日)	衆議院議員選挙 (H17年9月11日)	東京都知事選挙 (H19年4月8日)	小金井市長選挙 (H19年4月22日)	参議院議員選挙 (H19年7月29日)
20		34.15	22.64	21.74	32.81	23.60
21 ~24	30.36	21.83	41.79	27.54	26.64	27.41
25 ~29	27.93	18.13	40.86	27.00	23.53	33.20
20代計	29.14	20.72	40.07	26.74	25.51	29.98
30 ~34	35.71	28.57	52.4	40.40	34.49	39.47
35 ~39	38.97	41.33	57.4	47.54	38.54	41.92
30代計	37.34	34.94	54.81	44.02	36.54	40.62
40 ~44	46.98	39.19	67.31	52.33	48.48	47.94
45 ~49	53.62	45.37	71.04	55.51	53.42	51.91
40代計	52.76	41.84	69.1	53.85	50.80	50.00
50 ~54	56.49	48.74	73.17	55.67	59.43	62.58
55 ~59	63.33	56.64	68.69	62.37	55.05	64.16
50代計	59.91	53.05	70.81	59.59	57.05	63.27
60 ~64	71.55	59.78	71.38	68.82	66.08	66.10
65 ~69	67.46	68.16	72.9	70.13	73.77	63.80
60代計	69.5	63.56	72.14	69.43	69.82	65.00
70以上	69.15	59.96	76.93	64.72	63.25	68.01
合計	52.82	44.76	63.63	52.88	50.69	51.58

(資料)東京都選挙管理委員会

小金井市公民館

市制施行50周年記念事業

私たちの提言～「食を通した街の活性化」

経過と目的 市制施行50周年の記念事業として、公民館では、15歳～25歳の若者を対象とする企画を計画した。市政への提言をしていただくことで、若者に対して、小金井市政に関心と愛着を持ってもらい、併せて、行政、市民が若者の思いを相互に理解することを契機とすることを目的とした。同時に、高校、大学を越えた若者同士の交流の場を提供する。この実現のために、市内の高校、大学、専門学校にアンケートを実施して、協力要請をおこなってきた。また、スタッフの募集のために、各校に広報の協力をお願いしてきた。各館からプロジェクト担当を選出し、10回の会議を開催して準備を進めた。

また、参加したスタッフの会議を実施し、内容を討議した。スタッフミーティングにおいて、提案の柱として、当初は「祭り・イベントを通した街の活性化」と「食を通した街の活性化」の2案が出された。討議の結果、「食を通した街の活性化」に一本化することとなった。また、当初はシンポジウムを予定していたが、スタッフからプレゼンテーションを中心にしたいという提案があり、プレゼンテーションと講評、そして参加者の交流を企画の柱とすることとなった。

学生スタッフが、ラーメン店と農家にアンケートを実施して発表の材料とすることとした。

日 程・内 容・講 師・と ころ 別紙のとおり

広 報 市報・ポスター・チラシ、小金井新聞、アサヒタウンズ、東京新聞

人 数 ・参加者 51 人

参加費 無料

担当職員 松本、渡辺（本館）、鈴木、渡辺（貫井南分館）、若藤、小川

担当職員感想 公民館運営審議会などの場で、「公民館に若者を」という提言をいただいている。市制施行50周年という場を借りて、若者の企画を実施することが決定した。しかし、これまで一度も公民館に足を運んだことのない若者たちに呼びかけて、本当に参加してくれるのか等、不安な面もあった。事実、5月くらいまでは、スタッフが3人ほどで事業を企画できるような状態ではなかった。しかし、夏休み後に各大学の連携室の担当の方々が個別に声かけをしていただき、大学のホームページを使って宣伝していただいたりしていただき、次第にスタッフが充実してきた。また、大学の研究室の先生は、ポスターを研究室前に張り出し、関係するゼミを紹介してくれた。このような、多くの方々の協力をいただいた結果、皆様に喜んでいただけるプレゼンテーションの場を提供することが出来た。また、企画に参加した若者は、その後もサークルを立ち上げて、プレゼンテーションの内容を実現する活動を続けている。今後も、街づくりの講座等でこのような取り組みを支援していきたい。

◆◆ 市制施行50周年公民館企画「私たちの提案」 ◆◆

テーマ

食を通じた街の活性化

市制施行50周年記念事業に公民館が提案したものは・・・
15歳～25歳の若者に、企画から運営までを託した企画でした。
テーマは、「小金井市への私たちの提案」。
その、提案に応えた私たちの企画は・・・

プレゼンテーション

I ラーメンは小金井を救えるか

II 江戸野菜一品コンテスト

～農家と大学のコラボレーション



★ とき 11月16日(日) 午後3時～5時

★ ところ 小金井市公民館(福社会館4F)

★ 駐車場はありませんので車でのご来館はご遠慮ください。

ファシリテーター

★ 土井利彦さん(NPO法人ミュゼダグリ代表)

★ 酒井文子さん(食育・野菜コーディネーター)

★ 終了後交流会があります。

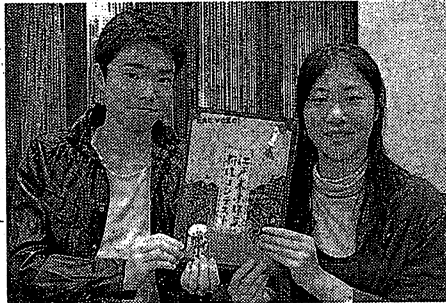
- 主催・問合せ 小金井市公民館
- 市制施行50周年公民館企画係
- 担当 松本、渡辺 (Tel.042-383-1184)



江戸東京野菜新レシピを求めむ

小金井 学生サークルが催し

伝統野菜の栽培によるまちおこしに取り組む小金井市



で、大学生のサークル「いがねこ」が、一般からレシピを募って「江戸東京野菜料理コンテスト」を開く。審査には料理研究家の枝元なほみさんらがあたる。学生たちは「江戸東京野菜をPRし、小金井を元気にしたい」と意気込む。「いがねこ」は、小金井を

料理コンテストのパネルフレットを持つ飯田剛史さん(左)と榊藤恵理さん(右)が小金井市東町4丁目

ひっくり返すような活動をしてほしいという意味をこめて「井・金・小」と逆に読んでつけた。東京農工大、亜細亜大、東京学芸大、法政大の学生約10人で活動している。

結成のきっかけは、昨年小金井市が主催した若者が市政へ提言するイベント。春から秋まで話し合いを重ね、案をまとめた。

小金井市は、4年前から江戸東京野菜の栽培に力を入れている。これを受けて農工大院生の飯田剛史さん(24)が発表した「江戸東京野菜の料理を広めよう」という案の実現のため、飯田さんが代表になり、サークルが動き出した。

レシピは、大蔵大根・亀戸

大根・金町こかぶ・東京長か

ぶ・伝統小松菜・しんとり菜

の6種のうち、1種類以上を

使っていることが条件。市内

ではJA東京むさし小金井経

済センターで買える。「いが

ねこ」メンバーで、地元育ち

で亜細亜大3年生の榊藤恵理

さん(21)は江戸東京野菜を

「焼いて塩をふっただけでお

いしい。小金井をもっといい

んな人に知ってもらいたい

ところだね」と言ってもらえ

るきっかけにしたい」と笑顔

で話した。

創作料理とスイーツ部門を

募集。食材費は4人分で千円

以内。創作料理は1時間以内

でつくれるもの。書類審査を

通過すると、市内で開かれる

12月6日の本審査で料理を作

る。審査員は料理研究家の枝

元なほみさんや「生協の白石

さん」として知られた農工大

広報大使の白石昌則さんら。

コンテストの締め切りは今

月20日。詳しくはHP (<http://iganekoyasai.blogspot.com/>)

年齢別人口報告表(外国人登録人口)

平成21年11月1日現在

年 齢	総数	男	女	年 齢	総数	男	女	年 齢	総数	男	女
総 数	2,427	1,243	1,184								
0～4	79	36	43	35～39	243	126	117	70～74	7	3	4
0	19	9	10	35	53	28	25	70	1	1	0
1	10	3	7	36	54	25	29	71	2	1	1
2	27	12	15	37	47	23	24	72	2	0	2
3	11	5	6	38	52	28	24	73	2	1	1
4	12	7	5	39	37	22	15	74	0	0	0
5～9	53	32	21	40～44	194	86	108	75～79	6	4	2
5	10	9	1	40	42	18	24	75	3	2	1
6	12	7	5	41	44	20	24	76	0	0	0
7	11	6	5	42	37	15	22	77	2	1	1
8	12	4	8	43	35	17	18	78	0	0	0
9	8	6	2	44	36	16	20	79	1	1	0
10～14	37	17	20	45～49	157	79	78	80～84	5	3	2
10	6	4	2	45	32	12	20	80	1	1	0
11	9	4	5	46	39	20	19	81	2	1	1
12	13	6	7	47	32	20	12	82	1	1	0
13	5	3	2	48	30	14	16	83	1	0	1
14	4	0	4	49	24	13	11	84	0	0	0
15～19	65	38	27	50～54	73	37	36	85～89	1	0	1
15	7	1	6	50	14	6	8	85	1	0	1
16	10	5	5	51	11	6	5	86	0	0	0
17	8	5	3	52	8	4	4	87	0	0	0
18	18	11	7	53	20	14	6	88	0	0	0
19	22	16	6	54	20	7	13	89	0	0	0
20～24	415	207	208	55～59	35	20	15	90～94	1	1	0
20	65	38	27	55	8	4	4	90	1	1	0
21	63	37	26	56	3	1	2	91	0	0	0
22	82	33	49	57	9	5	4	92	0	0	0
23	101	50	51	58	8	6	2	93	0	0	0
24	104	49	55	59	7	4	3	94	0	0	0
25～29	582	316	266	60～64	28	13	15	95～99	0	0	0
25	99	48	51	60	10	5	5	95	0	0	0
26	109	62	47	61	6	4	2	96	0	0	0
27	157	83	74	62	4	2	2	97	0	0	0
28	110	59	51	63	1	0	1	98	0	0	0
29	107	64	43	64	7	2	5	99	0	0	0
30～34	420	210	210	65～69	26	15	11	100以上	0	0	0
30	104	51	53	65	10	8	2	100	0	0	0
31	88	45	43	66	2	2	0	101	0	0	0
32	76	33	43	67	3	2	1	102	0	0	0
33	73	41	32	68	5	2	3	103以上	0	0	0
34	79	40	39	69	6	1	5	不詳者	0	0	0